

みんなの心の傷になる死にキャラなのに、
執着重めの皇太子が俺を死なせてくれない

登場人物紹介

◆ニル・エヴィヘット◆

Bレゲーム『薔薇の学園の特待生』の番外編だけに登場する護衛騎士に転生した青年。
セシルを庇って死ぬ運命を変えるために、襲撃犯を探しはじめる。

◆セシル・プログレス◆

サテリット帝国の皇太子で、『薔薇の学園の特待生』の攻略キャラクター。
護衛のニルとは幼いころから仲がよく、誰よりも大切な存在。

◆ゼラフ・ヴィルベルヴィント◆

俺様キャラの公爵令息。
攻略キャラクターだが、
なぜかニルに興味を持っている。

◆アイネ・リヒトヤー◆

『薔薇の学園の特待生』の主人公で、
特待生として学園に入学してくる。
愛らしい青年。

◆メンシス・ライデンシャフト◆

帝国騎士団の副団長。陰気で口を開けば嫌味ばかり。

◆リユージェ・ライデンシャフト◆

メンシス副団長の息子。理由はわからないがニルを敵視している。



第一章 もうすぐ死ぬキャラに転生しました

宮殿にある天井のない稽古場には、雲一つない快晴の空が広がっていた。

「——おいっ！ 大丈夫か！」

焦ったような友人の声を聞きながら、硬い地面に後頭部を強打する。その衝撃で、俺は前世を思い出した。

カラコンロンと木剣が音を鳴らして地面を転がっていくのを横目に、急激に流れ込んできた記憶に困惑しつつ空を仰ぐ。

（ここって、BLゲーム『薔薇の学園の特待生』の世界だ……）

俺はぶつけた頭を軽く押さえながら、冷静に分析をはじめていた。

『薔薇の学園の特待生』は、俺——ニル・エヴィヘットが前世でこよなく愛したゲームだ。だから、すぐにここがあの人気BLゲームの世界だと気づいた。

身体を半分起こすと、少し長い黒髪が視界の端に映る。多分俺の瞳は、この快晴の空のように澄んだ色をしているのだろう。

前世の記憶と今世の記憶が入り混じる感覚はまったく心地よいものではないが、とりあえず、転

生じたということだけは理解した。だが、この身体に転生したのは大問題だ。

「大丈夫か。ニル」

「うん……でも、今はかなり効いたかも。さすがは、セシル・プログレス皇太子殿下だ」

「どうした、やけに堅苦しいな。二人きりのときは『セシル』でいいと言っているだろう」

彼が「立てるか」と言って差し出した手を取り、起き上がった。

俺に手を差し伸べたのは、銀色の輝く髪を持った美青年——セシル・プログレスだ。

『薔薇の学園の特待生』の攻略キャラにして、俺の幼馴染で親友。さらには、ここ、サテリート帝国の皇太子で、俺の護衛対象。瞳は、夜の星空を閉じ込めたような色をしている。

（憎らしいほどにゲームそのままの世界だな……）

『薔薇の学園の特待生』は前世で女性に大人気のBLゲームだった。エロゲーにしては世界観の作り込みが細かく、いきなり濡れ場に入ることなくストーリーを楽しむことができる。そういった点が多く、ユーザーに評価された。

物語は、不思議な魔力を持つ主人公が、モントフォーゼン学園に特待生として入学するところからはじまる。いわゆる学園もののBLゲームだ。

前世の俺は失恋したタイピングでこのゲームを妹に勧められ、まんまとハマってしまった。課金もして、どのルートも攻略済みのガチ勢。その中でも、セシルルートは何度もやり直したため、セリフはだいたい覚えている。

俺が転生したこのニル・エヴィヘットは、攻略キャラであるセシルの親友キャラだった。しかし、

ニル自身は攻略対象ではなく、課金必須の番外編に登場するだけのサブキャラ。セシルの親友といいつつも、本編には名前しか出てこないキャラで、満を持して番外編でようやくそのビジュアルが解禁された。

（てか、今、いつだっけ？）

日差しは温かく、稽古場の敷地には春の花が咲いていた。

「ごめん、セシル。俺たちって何年生だっけ？」

「なんだ、その質問は。やはり頭を強く打っておかしくなったか？」

「ひどくない？ それくらい答えてくれたっていいでしょ」

「二年生……いや、この春休みが終わったら三年生だな」

セシルはため息をつきながらそう言うと、こちらを見た。俺が急に変なことを言い出したから、呆れているのだろう。

俺はそんなセシルとは対照的に、心が氷のように冷たくなっていた。

「あー……うん、そうだった。三年生になる前の最後の春休みね。ありがとう、セシル」

「別に構わない。誰だってふと忘れることもある……本当に悪かったな。少し、熱くなりすぎた」

「そんなに謝らなくていいよ。受け身をすっかり取れなかった俺のせいでもあるからさ」
セシルを納得させるために笑顔を作ってみたが、彼の表情は浮かなかった。

「セシル、不細工な顔してるよ」

「不細工とはひどいな。心配しているんだ」

「はいはい。心配性」

俺は軽口を叩いてセシルをあしらう。それから、その場に転がっている木剣を拾って、彼に渡した。俺は今しがた前世を思い出したばかりだが、昨日もその前の日もセシルと一緒にいた記憶も持っている。だから、身体に染みついた動作や癖、言葉はすんなりと出てきた。

「……はあ。お前が心配だから今日はこれくらいにしよう」

セシルは木剣を受け取って、また心配そうに俺を見た。

ゲームの本編の彼は常に一人で、どこか寂しそうな雰囲気をもっていた。でも、目の前の彼は違う。

セシルは人嫌いで、常に警戒心マックスのキャラとして描かれている。おまけに不眠症も患っており、常時機嫌が悪いという一番好感度を上げにくいキャラなのだ。

そして、不眠の原因は、彼との添い寝イベントによって明かされた。

イベントの最中、セシルは何度も悪夢に魘^{うな}される。

そう、その悪夢の原因こそニルにあるのだ。

ニル・エヴィヘットという男は、三年生になる直前の春休みに、セシルを狙う刺客によって命を落とす運命にある。この内容は、最近追加された課金必須の番外編『セシル・プログレスと春の彼』で明かされた。主君を守る騎士として最高の姿が、スチルになっていた。

しかし、セシルは自分の不注意のせいで、乳兄弟でもあったニルが死んでしまったと自分を責め続けることになる。

「セシル、あとさ……頭を打ったせいで今日が何日か忘れてしまったんだけど」

さすがにわざとらしくたどろろか。ちらりとセシルを見ると、本当に大丈夫か？　と言って俺に顔を近づけてくる。攻略キャラで顔がいいんだから、もう少し自覚してほしい……とは言えない。

俺は、目を逸らすことで、なんとか彼の美の暴力から逃れることができた。

「三月五日だ。春休みは残すところあと一か月ほどだな。本当に、医者に診てもらわなくて大丈夫なのか？」

「うん。大丈夫、大丈夫。セシルは心配しすぎなんだって」

セシルの気遣いは嬉しかった。

彼を心配させないように笑顔で取り繕いながら、番外編のストーリーを思い出す。

(俺が死ぬまで、あと三週間前後か……)

前世を思い出した直後に、余命宣告をされた気分だ。

だが、その余命宣告は俺の行動次第でどうにか覆すことができるかもしれない。

なんとしてでも自分の死は回避したい。しかし現状、セシルを庇^{かば}って死んだということしかわからない。

背後を取られたセシルを守るためにニルが——という流れだったから、襲撃のときに俺が違う行動に出た場合、セシルが死んでしまう可能性がある。

自分の死を回避するために、セシルを危険にさらしたくない。

課金しないと遊べない仕様だからか無駄にスチルが多かったが、肝心な刺客の情報はあまり描か

れていなかった気がする。皇太子を狙う輩は多いだろうし、その理由もさまざまだ。

俺が最優先にすべきことは、刺客の情報を手に入れること。

そう考えつつ、セシルを見る。彼は、あどけない表情で首を傾げていた。

「何かあったか？」

「ううん、なんでもないよ。ありがと。そっか、春休みって短いね」

「まだ、一か月あるだろ？　なんだ、ニル。お前は学園が好きじゃなかったのか？」

俺は苦笑した。セシルに怪訝そうな顔を向けられたが、今は笑って乗り切るしかない。

（はあ、セシルはどんな顔をしてもらったかいいなあ）

きりりとした眉に長いまつ毛の端正な顔。さすが攻略キャラであり、皇族といった感じだ。

俺——ニルも番外編でその姿が明らかになったが、なかなかイケメンだった。でも、攻略キャラの顔のよさには勝てない。それにどちらかと言えばニルは童顔だった。

俺はそんなことを思い出しながら、額に腕をこすりつけて汗をぬぐう。

「汗でべとべと。俺はシャワーを浴びてくるけどセシルはどうする？」

「シャワーでいいのか？　どうせなら俺の部屋のバスルームを使わないか」

「えっ、俺はいいよ。従者の俺がそんなところに行くなんて」

「俺がいいと言っているんだ。拒否する理由はないだろう」

「いや、なんで……」

「それは……そもそも、お前は俺の護衛だろう！　いついかなるときもそばにいてくれないと困る」

そう言ったセシルの目は泳いでいるように見えた。他に理由がありそうだったが、俺は詮索せず
に「あっそう？」と返す。

「でも、バスルームに剣は持っていけないよ」

「そうだな、だが……お前はその身一つで俺を守るほど強いはずだ。職務放棄する気か」

「別に職務放棄しようなんて考えてないから。てか、お風呂と一緒に入るのが仕事になるわけ？
あと、都合のいいときだけ俺を護衛扱いしないでよ。さっきは、『皇太子殿下』って言っただけで怒っ
たくせに」

俺の反論にぐうの音も出ないセシルは、「だが」と言葉を紡いだ。

「それはそれだ」

「それはそれ、って。そんな子どもみたいな」

「……別に、昔は一緒に入っていただろう」

ぼそりと呟いたあと、「じゃあこれは命令だ。一緒に風呂に入れ」と言って俺を指さした。こうなっ
たらセシルは何を言っても折れないので、俺はしぶしぶ両手を上げる。

命令となれば、拒否権はない。

俺はセシルと一緒に育ってきた。だから、確かに一緒にお風呂も入っていたし、裸なんて何度も
見ている。

俺たちは乳兄弟であり、主人と従者であり、そして親友だ。

俺のことを必要としてくれるセシルを見ると、嫌な気持ちには一切ならなかった。少し強引

だが、それがセシルという男だ。

「わかった。セシルの言う通りにするよ。じゃあ、またバスルームで」

「ああ。あまり無理して走るなよ。身体に響くぞ」

「わかってるよ。心配性」

「……ニル、わかってないだろ」

そんな文句を言い合ってから、稽古場をあとにした。

「はあ……」

広い廊下に出て、誰もいないことを確認し、息を吐く。

前世の記憶を取り戻したことはセシルにバレなかったが、尋常じゃないほど心臓が早鐘を打っていて、頬の筋肉はカチコチに固まっている気がする。

(さてと、どうしようかな)

三週間前後で訪れるセシル暗殺未遂事件。

刺客が何人いるかも、その主犯格もわからない以上、イベントを回避することは絶望的だ。

今、俺が持っている手札はゲームの知識だけ。俺が死を回避するために下手な行動を取ると、セシルが死ぬ可能性だってある。ストーリーを改変しようと動くのはかえってリスクだ。

「は、はは……震えてる」

普通に生きて、普通に寿命を迎えて死ぬものだと思っていた。死を間近に感じたことはなかった。だから、目の前に死が迫っていると知って足がすくみ、身体が震えている。

(死にたくないな……)

だが、まだどうなるかわからない。立ち止まってはられない。

自身の死の回避を目標に、俺はこの春休みを越えてみせる。

(セシルに、本編と同じように苦しんでほしくない)

脳裏には、番外編でセシルが見せた絶望の顔が浮かんできた。

俺が死んだらセシルは悲しむ。親友として、護衛として、それだけは防がなくてはいけない。

「よし」

とにかく、情報を集めることから始めよう。何せ俺の父は帝国騎士団の騎士団長なのだから。使える手札は切らなければ損だ。

俺は気持ちを切り替え、一步踏み出したのだった。



「ふう、やはり鍛錬のあとは風呂に限るな」

「こんなに広いのに、男二人ってさ。なんか笑えるね」

大理石造りのバスルームの浴槽は、前世の学校のプールくらい広く、二人で入るにはもったいない大きさだ。

俺たち男二人に似つかわしくない青い薔薇の花弁が浮かんでいて、雰囲気少し色っぽい。この

美しい薔薇は、宮殿の庭園に咲いているものだろう。

(なんか贅沢だよな……)

何度も入ったことのあるバスルームだが、改めて広く感じる。

俺はあまりの広さに落ち着かず、青薔薇の花弁をつまんだり、集めたりしてみる。

隣でセシルがふう……と息を吐き、髪をかきあげる様子が目に飛び込んできた。

セシルの銀色の髪はすでに濡れて水滴が滴っており、色気が増している。血色のよい肌に、俺よりもしつかりついた筋肉。特に発達した胸筋や、肩から腕にかけての筋肉は目を見張るものがあった。同じように剣を握り、鍛錬を積んできたはずなのに、どうしてここまで差がついてしまったのだろうか。俺は自身の胸に手を当て、セシルの胸筋と見比べた。すると、彼の夜色の瞳と目が合ってしまった。

「な、なんだ、先ほどからじろじろ見て。恥ずかしいだろ」

「見てないし。てか、セシルに恥ずかしいっていう感情があるのが驚きかも」

「見ていただろう！　なんだ、ニルは俺の身体に興味があるのか？」

「ない……いや、ないこともないんだけど。ああ、もうなんで近寄ってくるの！」

「もっと近くで見たいのかと思ってな」

そんなことは言っていない。

セシルは、俺の制止を振り切って自信満々に近づいてくる。だが、俺の目の前まで来るとパッと顔を逸らしてしまった。

「何？　恥ずかしいって感情が戻ってきたわけ？」

「かもしれない」

「……セシル、思ったんだけどさ。俺たち何度も一緒に風呂に入ったことあるから、別に見てもいいでしょ」

「お前に見つめられると困る」

「なんで？」

「それは、ニルが……いや、なんでもない」

セシルはそこで話を切り、ブクブクとお湯に半分顔を沈めた。

変なの、と思うながら俺は改めて自分の胸に手を当てる。護衛騎士である俺が、主君よりも筋肉がないのはどうなのだろうか。

俺の身体は筋肉がつきにくいタイプだが、ないわけじゃない。いわば細マッチョの部類だ。でも、だからこそセシルの肉体美に惚れ惚れしてしまうし、うらやましく思う。

修学旅行のお風呂タイムではしゃぐ学生みたいな会話をしながら、もう一度セシルを見た。

(セシル・プログレス皇太子……攻略難易度、バカ高皇子)

ゲームの知識から考えると、セシルは人を寄せ付けない冷酷皇子だ。とにかくパーソナルスペースが広く、親しい人間でもある一定の距離までしか近づけない。ただ一人、そのパーソナルスペースに入れる人間がいるとすれば、俺——ニル・エヴィヘットだけだった。

セシルは、眉目秀麗、文武両道、剣の腕も魔法の才もあって、非の打ち所のないイケメンだ。特

にビジュアルは、イケメン揃いの攻略対象の中でも群を抜いている。

そのかつこよさから、ゲームをはじめたばかりのユーザーが最初に攻略しようとして、難易度が高くて失敗するキャラでもあった。俺も最初の攻略で見事失敗した。

そもそも俺がこのゲームにはまった理由は、ストーリーや攻略対象のビジュアルのよさもあったが、失恋した相手とセシルの声が似ていたからだ。

（思い出しただけで辛いな……もう、未練はないけどさ）

前世の俺は、ずっと一緒に育ってきた親友の男に恋をしていた。

自分の恋心に気づいた高校生のときに、彼が異性愛者であると知ってしまったのだ。俺は親友の恋愛相談に乗って、彼は晴れて好きな女子と結ばれた。俺は上っ面だけの祝福をして陰で泣いた。卒業式に告って成功するという稀に見ない成功パターンだった。

失恋して一か月ほど経ったある日、大学生になる直前に妹にこのゲームを勧められた。最初は嫌がらせかと思ったが、セシルの声に惚れてはじめると思うとすぐに沼ってしまったのだ。ビジュアルも俺の性癖に刺さった。

それからの俺は、画面の向こうのセシルに親友を重ねた。その後、ニルという親友が出てきて、彼らの仲のよさに古傷を抉られたわけだが。

セシルがニルに恋愛感情を抱いていたかは定かではないが、とにかく大きな感情を向けていたことは確かだった。そりゃ、長年一緒に生きてきた親友が自分を庇^{かば}って死んだら傷つく。

ニルはそんな特殊な設定のキャラだったからこそ、人気が高かった。ゆえに、番外編を読んだほ

とんどのユーザーの心に傷を残したのだ。

でも、実際に番外編を読まなければ、ニルはセシルが主人公に新たな愛を向けるためのお膳立てキャラにしか見えない。心のどこかで主人公にニルを重ねていたセシルが、ニルへの執着を捨て、主人公という人間を愛するようになる……

決してニルのことを忘れるわけではないが、セシルは過去の思い出に縋るのをやめ、未来に向かって歩くことを決意するのだ。

そんな死にキャラであるニルのストーリーは泣けて好きだった。でも、やっぱり一番はセシルだ。（今やそんな推しで、ガチ恋に足突っ込んだじゃったセシルが目の前にいるんだよな）

しかも裸で、たくましい筋肉を俺に向けて。

スチルで何度も見た裸が目にある。

これまででは気にならなかった。なのに、こんなにも魅力的に見えるのは前世の記憶のせいだろう。いや、もしかしたら、ニルもセシルのことをそういう目で見ていたのかもしれない。

真相はわからないが、少なくとも俺はセシルに好意を抱いている。もちろん親友として、推しとして、人間的に好きという意味だが。

「本当に、怪我していないんだな？」

「だーかーらー！ 大丈夫だって言ってるじゃん。過保護すぎ」

「盛大に後頭部を強打してよく言う。ニルは石頭なのか？」

自分のことは見るなど言ったくせに、セシルは俺をじっと見つめてきた。そしてさらに、鼻と鼻

がくつつくんじゃないかと思うくらい距離を縮めてくる。俺は咄嗟に避けようとしたが、それよりも早くグッと腕を掴まれてしまう。

稽古場でのあの事故は、罅迫り合いつばせあひになった際に起こったことだ。

セシルの攻撃が当たったわけではなく、俺が不注意で倒れただけ。セシルに非はまったくないのに、彼は俺のことを心配そうに見つめている。

「ちよっと、セシル」

セシルは俺の顔の輪郭をなぞった。指先が耳を掠めて、俺は思わず身じろぎしてしまう。

「やっ……」

「……っ、悪い！」

「い、いきなり触るの禁止!! 触れるとくすぐりたいし、恥ずかしいから」

俺はなんとかそれらしい理由をつけてセシルの手を払った。

触れたところが沸騰してしまいそうだ。推しが触れたという興奮と、単純なくすぐったさで心臓がバクバクと音を鳴らす。俺はセシルが触れたほうの耳を触った。

彼は一瞬ドキッとしたような顔をしたあと、フッと意地悪く笑った。

「ニルの弱点か。覚えておこう」

「いや、覚えなくてよ……セシル、性格悪いよ?」

冗談なのか本気なのかはわからない。

俺が耳を守るように手を当てながら距離を取ると、セシルは少し傷ついたような顔をした。

俺はそんなセシルをかわいく思いながら、先ほどの手合わせを振り返る。

「今日の勝負は俺の負けでいいよ。倒れたのは俺の不注意だったわけだし。敗因は相手に隙を見せたこと。これまで手合わせしてきたけど、今日のをカウントしたらセシルのほうが二回多く勝ったってことになるね」

「棄権ということにもできるだろう」

「棄権は負けと一緒にしょ」

「そう、なのか? だが、お前らしいな。しっかりと分析し、負けを認めるその潔さはさすがだ。

お前がそれでいいなら、俺は三百二勝、お前は三百勝になるな」

まんざらでもない顔だった。

今のところ俺はセシルに負け越しているが、引き分けも多い。

俺は帝国騎士団の騎士団長である父の才能を引き継いでいるが、セシルは違う。彼は、持ち前のストイックさと努力によって剣の腕を磨いた。才能に恵まれている俺と剣を交えても、セシルは毎回五分五分……いや、押し気味に持ち込む。

なんといっても、セシルの強みは圧倒的な腕力にある。一撃一撃が重く、真正面から受け止めるのは至難の業だ。そのうえ、セシルは負けず嫌いなところがあり、負けたら勝つまでやると言っている。聞かない。

この勝負は、幼いころからずっと続いている。俺たちは常に切磋琢磨しあって生きてきた。きっとこれからも、それは変わらないだろう。

「今度は勝つよ。負けっぱなしじゃいけないからね」

「ああ、いつでもかかってこい。それに、休みが過ぎればまた学園に戻ることになる。今年の大会も優勝を目指すからね」

「セシルに勝てる人が他にいるかな？」

春休みが明けたら、俺とセシルは三年生になる。俺たちが在籍している騎士科以外にも、モンτροφォーゼン学園には魔法科や商業科といったさまざまな学科があり、国中から優秀な生徒が集まっている。

セシルの言う大会というのは、五月に開催される学科別実技大会のことだ。通称『剣魔大会』。この大会でセシルは、去年も一昨年も騎士科一位という成績を収めている。

（まあ、そこまで俺が生きているかわからないけど……）

濡れた前髪を払いながら、思わずため息が漏れた。そんな俺を見逃さなかったセシルは、夜を閉じ込めた瞳でじつと見つめてくる。

「な、何？」

「ニルがため息なんて珍しいと思ってな」

「いや、ため息をつくことくらいあるでしょ。それとも、ついちゃダメ？」

「……悩みがあればなんでも相談してほしい。将来のことでも、なんでもいい。お前の話が聞きたい」セシルは力強くそう言って俺の手を握る。俺は笑みがこぼれた。

「そうだね。ありがとう。心強いよ、セシル。何かあったら相談させてもらうよ」

「そうか。先ほどは少し変だと思ったが、いつも通りのニルだな。お前のことはよく知っているはずなのに別人に見えた」

「え……いやあ、頭を打ってちょっとおかしくなってたかも」

凶星を突かれた。けれど、前世の記憶を取り戻したなんて言えるわけない。

俺は慌てて首を振って否定したが、セシルは「やつぱり、頭を打ったのが原因か？」と気にしている。過保護すぎるというか、大げさすぎるというか。ちょっと抜けていて、俺のことになると冷静さに欠けるのが彼の最大の弱点なのかもしれない。

大丈夫だと言って、セシルの手を握り返す。俺と同じように剣だこのある硬い手のひら。俺よりも少し大きくて長い指に俺の指を絡めると、セシルの指先がピクリと動いた。

「ニル？」

「何度も言うけど、セシル。俺のこと心配してくれてありがとう」

「……………当たり前だろう。親友なのだから」

「あははっ、そうだね。でも、そうやって直接言ってくれるのが嬉しいよ。セシルのそういうところ、好きだな」

俺がそう言うと、セシルは一瞬だけたじろいだものの、咳払いをして「ああ」と嬉しそうに返事をした。

そんなセシルの表情は、俺にしか見せない優しい笑顔だった。



次の日もよく晴れた。

前世の記憶を取り戻して一日が経ち、転生していたことと、これから起こりえることを整理できた。春休みの間にセシルと俺に訪れる事件について考えずにはいられなくて、不安が胸の中で渦巻いていた。

宮殿の廊下を歩き、いつものように稽古場に向かう。一日でも鍛錬を欠かせば、その遅れはやがて大きなものとなる。一分一秒も気が抜けない。鍛錬を積んで己を磨くことが、セシルの護衛騎士としてできることだ。

稽古場に着くとすでにセシルがいた。彼は俺に気づかず剣を振っている。

「おはよう、セシル。いつも早いね」

声をかけると、セシルは手を止め、片手で汗を拭いながら俺を見た。

セシルの朝は早い。俺がセシルより早く起きたことなんて数える程度しかない。ちゃんと眠れているのだろうかと思配になるほどだ。

セシルは剣を鞘にしまい、俺に駆け寄ってきた。

「寝坊か？ いつもより十分程度遅かったじゃないか」

「そうだね、寝坊しちゃった。セシルより早く起きようと努力はしてるんだけど」

「ニルは朝が弱いからな。寝癖も治っていない」

「これは癖毛だから、寝癖じゃないって。ちよつと遅刻しただけでそこまで言わないでよ」

「ははっ、ついつい押^{から}揃^かいたくなるんだ」

はねた髪を押さえて抗議すると、セシルはなぜか嬉しそうに笑っていた。人が気にしていることを言ってくるなんてひどい男だ。

いつもなら寝癖はしっかり直し、もう少し早めに稽古場に向かうのだが、昨日はよく眠れなかった。理由はただ一つ、これからのことを考えていたから。

番外編のストーリーは、主にニルとセシルの友情を描いていた。だから、襲撃シーンのスチルはあったものの、刺客がどんな目的でセシルを狙ったのかは明らかにっていない。それだけではなく、いつどこで刺客に襲われるのかもストーリーで描かれていないのだ。

わかっている情報といえば、襲撃の時間が夜だったことくらい。

刺客や襲撃の目的がわかりさえすれば、未然に防ぎやすくなるだろう。ただ、セシルをはじめ皇族に反感を抱いている貴族や組織を、数週間の間に絞り切るのは難しい。

第一皇子の護衛である俺が頼んだとしても、騎士団が動いてくれるとは限らない。頼れる相手がいるとすれば騎士団長である父だ。父は忙しい人だから、証拠がない状況では協力してくれないだろうが、相談しようとは思っている。

まずは自分にできることから始めよう。それが、身体能力を高めることだった。

「そういう日もあるの。明日からは寝坊しないから……さ、練習しよう。一分一秒でも無駄にでき

ないからね」

「ああ、よろしく頼む」

俺たちは互いに距離を取り、剣を構える。そして、どちらからともなく地面を蹴り上げた。雑念を捨て、ただひたすらに剣を振る。金属同士がぶつかる音を聞くと、身体の熱が上がる。キン、カキンッとせめぎ合い、火花を散らす。近づいたと思ったたらすぐに距離を取り、相手の出方を窺って、また飛び出す。その繰り返しだ。

「はあっ！」

一段と強く踏み込んで距離を詰めたが、渾身の一撃は防がれ、隙をついてセシルが攻撃を仕掛けてくる。俺はなんとか受け止めた。

そうして互角の勝負を続け、今日は引き分けになった。

いったん休憩を取ろうかと目配せする。二人とも呼吸は荒く、滴る汗を服で拭った。

「セシル、日陰で休む……って、うわっ……ご、ごめん。セシル」

移動しようと数歩歩いたところで足がもつれ、倒れそうになったところをセシルが支えてくれた。少し身長差があるので、彼の腕の中に閉じ込められてしまう。厚い胸板がすぐ近くにあった。

俺は慌てて体勢を立て直そうとした。だが、今度はセシルがバランスを崩し、こちら側に倒れてくる。咄嗟にセシルの身体を支えると、セシルが俺に抱き着く形になってしまった。

「す、すまない」

「ううん、大丈夫。お互い様でしょ。それよりも、顔赤いよ？ 大丈夫？」

「そっ、それは、お前もだろ」

紅潮した顔に、絶えず流れ落ちる汗。抱き合って見つめ合っていると、変な気持ちになってくる。セシルは否定したものの、かなり頬が赤く染まっていた。

その後、俺たちは休憩を長めに取ろうということで意見が合致した。ベンチのほうに移動しようと思って身体を離すと、大きな人影が稽古場を通りかかるのが見えた。

「お久しぶりです。皇太子殿下」

「騎士団長殿か。そんなに久しいだろうか」

「はい。最近では立て込んでおりましたので……それと、励んでいるか。ニル」

「は、はいっ。父上!!」

日陰から出てきたのは父だった。俺より三十センチほど背が高く、大柄で、ツンツンとした灰色の刈り上げヘアが特徴的だ。重そうな大剣を背負っており、俺とはまるで似ていない。帝国の騎士服に身を包んでいるものの、胸元のボタンは上から二つ開いていてワイルドだ。

俺は最低限の身なりを整え、慌てて父に敬礼をした。

父は帝国騎士団をまとめる騎士団長であり、エヴィヘット公爵家の当主でもある。俺は父を尊敬しているし、目標にしていた。父は帝国最強の剣士であり、この国で一番腕が立つと言われている。俺とセシルが束になっても一度として攻撃が通ったことがない、負けなしの最強騎士だ。

しかし、父はゲームでは名前だけしか登場しない。息子のニルが死んだことによって心を病み、奇襲に気づかず殺された……と番外編で語られていた。

(もし俺が死んだら……)

セシルだけではなく、太陽のように明るい父も悲しませてしまうことになる。俺はこの春休みを生き延びねばと改めて決心し、拳を握った。

父は厳しいが、とても子煩悩な人だ。俺に剣を教え、騎士としての在り方を教えてくれた。俺のことを誰よりも応援してくれている。だから、父の期待に応えたいし、悲しませたくない。

「父上は、どうしてここに？」

「ちょうど偶然近くを通りかかったところだな。聞き慣れた声がしたから立ち寄ってみたのだ。フツ、ニル……まだまだだな」

「はい。目標である父上にはまだまだ届きそうにないです」

「俺を目標にしているのか。カッカ！ それは楽しみだな。ならば、一つアドバイスをやろう」

父はまだまだと言いつつも、いつもしっかりとアドバイスをくれる。俺はそれが嬉しくて、少し前のめりになって父の話を聞く。

父は身振り手振りを交えて説明をはじめた。

「いつも言っているだろう？ 敵の動きだけを見るのではなく、周囲の環境にも同時に気を配ることが重要だ。利用できるものはなんでも利用しろ。それと、つい先日剣を新調したと聞いていたが、使い勝手はどうだ？」

「はい。それが、俺の技量の問題かもしれませんが、思ったように動かせなくて」

「そうか。じゃあそれは技量の問題じゃないな。ニル、お前は素早いから、人よりも多く手数を出

すことができるだろう？ だが、それが生かせていないということは、剣が重いんじゃないか？ 剣が重くて長所を生かせていないのなら、軽くて細いものにしたらどうだ。そのほうが、お前の身体に合うだろう」

「なるほど、勉強になります。父上」

確かに俺の体格からすると、細身の剣のほうが合っているだろう。剣を変えたら、素早さを生かした攻撃ができるかもしれない。

環境の話に関しては、昨日、セシルとの手合わせ中に転んだことを指摘されたようで、頬が引きつった。

「恐れながら皇太子殿下も、力任せの攻撃は身体を痛める原因になります。相手の力を正面から受け止めるのではなく、流すようにすればよろしいかと思えます」

「そうか、団長殿、勉強になる。団長殿の言うように、長く剣を振るうためには必要な技術だな」父はにこりと笑った。

偶然通りかかったと言っていたが、少し前から俺たちを見ていたのかもしれない。そうでなければ、ここまでの確なアドバイスはできないだろう。その気配に気づけなかったのは、セシルの護衛としてあるまじき失態。これから気をつけよう、とよりいつそう気を張る。

笑顔を絶やさず、どんな逆境にも耐える父のようにになりたい。

場が和んだ今なら、あのことを相談しやすいかもしれない。俺は意を決して口を開いた。

「父上、少しお聞きしたいことが……」

刺客のことを聞こうと思って父に話しかけたとき、後ろに控えていた男が咳払いをした。明らかにわざとらしい咳払いで、俺は眉を顰める。

「団長殿、そろそろ時間です。職務を怠っていると、他の騎士たちから苦情が来ます」

「もうそんな時間か。ニル、何か用だったか？」

「あ、いえ……大丈夫です。また時間があるときにでも」

父は近くにあった時計をちらりと見る。

「そうか。じゃあ、仕事に戻ることにしよう。皇太子殿下、私はこれで失礼いたします。うちの息子をよろしく願います」

「ああ、心得た」

「ちょ、ちよつと、セシル……父上も、なんでそんなこと言うんですか！」

俺がセシルを守る側だから、「皇太子殿下をしつかりとお守りするんだぞ」と言うのが普通ではないか。

父にそう文句を言おうと思ったが、すでに稽古場から去ったあとだった。

（うーん。でも、忙しい人だからしょうがないよな）

本当は、皇族に反感を抱いている人間の情報や、敵が複数人現れたときの対処法などを聞きたかったが、父は忙しい人だ。無理に引き止めることはできない。また今度時間があるときに話を聞くことにして、まずは自分で対策を練ることにする。

（……それにしても、あの人は誰だっけ？）

父に声をかけた男は誰だっただろうかと記憶を手繰り寄せる。ワインレッドの長髪の男は、父と同じ騎士服に身を包んでいた。敬語を使っていたものの、父と対等に話しているように見えたので、それなりの役職の人物であることは確かだ。

考えごとをしていると、セシルが俺の隣にやってきて稽古場の入り口を見据えた。

「団長殿は相変わらずだな」

「うん。でも、やっぱりすごい人だよ。俺も、もっと頑張らないと。ところでさ、後ろにいた人って誰だったっけ？」

「ニル、忘れたのか？ 彼は、一年ほど前に副団長に就任したメンシス・ライデンシャフト侯爵だ。団長殿をライバル視していて、副団長就任前は社交の場でだいぶ嫌がらせをしていた。知らないのか？」

まったく記憶になかった。セシルの耳にも入っているということは、それほど陰湿な嫌がらせだったのだろう。

だが、父からそういった話は聞いていない。先ほども、普通に騎士団の同僚として接しているように見えた。父が仕事に私情を持ち込まない性格であることは有名だが、メンシス副団長も同じなのだろうか。

俺たちは休憩を終わらせることにして、立ち上がる。

「さ、もう一度やろう。今度は俺から行くよ」

「ああ、いつでも来い」

そんな会話をして、再び剣を交えた。

父上に言われた通り、周囲をよく観察する。稽古場の地面は固いが、気を抜くと荒い砂に足を取られて滑ってしまいそうになる。俺は地面を蹴る力加減を調節しようと考え、実践してみることにした。すると、先ほどよりも身体が軽く感じる。

（確かに、これなら小回りが利きそう）

変わった俺を見せてやると意気込んだが、同時にセシルの動きも変わって隙がなくなった。互いに、父のアドバイスを実行しているからだ。

（こーやって鍛錬を積んでいけば、襲撃に対応できるようになるかもしれない……!）

焦る気持ちを抑える。そして、ただ強くなるためにもう一度剣を振った。

セシルを守り、自分の未来を変えるために。

額から流れた汗はまるで星のようだった。



セシルと抜け出してきた宮殿が遠くに見える。昼間の青空には、綿菓子のような雲がぼつぼつと浮かんでいる。

城下町は、貴族や商人、平民など、さまざまな人が行き交っていた。

「勝手に抜け出して、怒られるよ。セシル」

「大丈夫だ。誰にも見つからないはずだ。それに、ニルも一緒に来ているから同罪だ」

平民らしい装いのセシルはニヤリと笑って俺を見る。

父にアドバイスをもらってから二日が経った。俺たちは今、城下町に来ている。

本来であれば、第一皇子であるセシルはむやみに外に出られないが、宮殿にある秘密の抜け道を使った。

もちろん、無断外出はこれが初めてではない。

セシルの髪色は変装魔法によって茶色になっているが、不思議な色の瞳までは変えられなかったらしい。平民風の装いだが、明らかに高貴なオーラを放っている。

俺も髪型を変えて眼鏡をかけ、セシルの後ろを歩く。

セシルが外出する際は、俺の他にも何人か護衛を連れて歩くのが決まりだ。無断で外に出たことがバレたら怒られるのは確実だった。

「ニルは心配すぎだ。それに、怒られたくらいでやめるつもりはない」

「いや、そうじゃなくて。刺客が現れたらどうするのさ」

「そんなことをいちいち気にしていたら息が詰まるだろう。襲ってきたら返り討ちにすればいいだけの話だ。それに、お前もいる」

「もー、皇太子なのに樂觀すぎるよ。そりゃ、君のことは守るけどさ」

正直に言うと、俺は二人で出かけることには不安しかなかった。

いつ狙われるかわからないというのに、セシルは「大丈夫だ」と言って、俺の手を引いて強引に

外へ連れ出した。

「皇太子……か」

俺が『皇太子』と言ったからか、セシルの眉間にしわが寄った。彼はそう呼ばれるのを嫌っている。セシルは自分が皇太子だという自覚を持ちつつも、一方で何にも縛られずに自由に生きたいと思っている。彼は長い帝国の歴史の中で、きわめて異質な考えを持つ人物だった。

だが、セシルのおかげで、俺は彼の護衛という立場であるにもかかわらず、親友として彼の隣にいられる。

（はあ……もう、危機感ないんだからさあ）

そう思うも、これ以上グチグチ言っただけの機嫌を損ねたいわけではない。俺が気をつけなければならないだけの話だ。

二日前、俺は仕事終わりの父を捕まえることに成功した。「護衛騎士としてセシルを守るために、今以上に頑張りたい」と言っただけで、皇族を狙う輩について聞いてみたが、候補が多くて絞り込めなかった。

そんな状態で、セシルと外出を楽しむわけがない。ゲームで見たスチルは夜だったが、セシルの周りには常に危険が付きまとう。一分一秒も気が抜けない。

セシルはそんな俺をよそに、能天気な隣を歩いている。もしものがあつてからでは遅いの、何を言っても大丈夫だと軽く受け流されるのだ。セシルが強いことは十分理解しているが、不安なものは不安だ。

（人の気も知らないで……）

それでも、セシルを前に暗い顔をしてはいけないと思い、笑顔を取り繕う。

俺は気を紛らわせるために、偶然目に入った露店を指さした。

「セシル、あれ食べない？」

「露店か。確かに、おいしそうだな」

「でしょ？ もうお昼時だし」

俺はセシルを連れて露店が並ぶ通りまで歩いていく。そこではさまざまな露店が食べ物売っており、食欲を誘う匂いがあちこちから漂っていた。

俺が興味を持った露店は、肉や野菜の串焼きを売っていた。俺は店主に声をかける。

「おじさん、これ二つください」

「あいよ！ 二つで銅貨十枚だ！」

「じゃあ、これで」

俺は懐からお金を出して、店主に渡す。すると、セシルが横から口を挟んできた。

「俺が出す」

「いや、いいって。というか、セシルに出させるのって」

「ここまで来て従者らしさを出すな！ 俺たちは親友だろ？」

「うっ……なんか、親友を魔法の言葉か何かと勘違いしてない？ まあ、セシルがそう言うなら、割り勘でもいいけど」

俺は出しかけたお金を半分引つ込める。結局自分の分は自分で出すことになり、俺たちは一本ずつ串焼きを買った。

そして、露店から離れたベンチに座ることにした。

今俺たちがやっていることは、前世でたとえるなら学校をサボって遊びに行くことに近い。許可を取らずに、無断で宮殿を抜け出してきた。背徳感を覚えながら食べる串焼きは格別だった。

長い串に刺さった肉と野菜を交互に食べて、感想を言い合う。味付けは塩コショウとガーリック。口の中に入れるとじゅわあつと肉汁が溢れだし、少し甘めの玉ねぎはいい焼き加減でいくらでも食べられる。

半分食べ進めたところで、俺はふとセシルに話しかけた。

「前に宮殿を抜け出したのはいつだったけ？」

「帝国建国記念パーティーの日だな。夜会がおもしろくなって抜け出して、外で花火を見た」

「そうだった。露店に行きたかったけど、その前に見つかって怒られたんだよね。懐かしいな」

俺はそのときのことを思い出していた。

サテリート帝国では毎年、帝国建国記念パーティーとパレードが行われる。

確か十歳のころのことだった。もう大きくなったからなんでもできる！魔法も使えるようになった！と、調子に乗っていた時期だったのを覚えている。

そんなまだまだ子どものときに、俺とセシルは二人で宮殿を抜け出した。つまらないパーティーよりも、冒険をしたかったのだ。

城下町が一望できる丘の上で花火を見た。赤や黄色、オレンジと夜空を彩る花火は、今でも目を閉じれば思い出せるほど鮮明に記憶に残っている。でも、城下で流れていた陽気な音楽につられて歩いていたら、従者に見つかって宮殿に戻された。俺は父にこっぴどく叱られ、セシルも皇帝陛下に怒られて一か月ほど謹慎を言い渡された。

懲りない俺たちは、それからまたたび許可なしに外に出ている。思い返すと懐かしくなるが、俺たちは今も変わっていない。

セシルは最後の肉を平らげて、「もう一本買ってもよかったな」と言いながら俺を見た。俺の串には肉も野菜もまだ残っており、どうやらそれを狙っているようだった。野菜に目がいかないところを見ると、よっぱど肉がおいしかったらしい。

「食べる？」

「いいのか？　だが、それは、その、間接キ……」

「ん？　何？　ほら、セシルのほうがよく食べるし。俺はこれくらいでも十分だからさ。それに、セシルがおいしそうに食べるのを見ると、なんか嬉しくなっちゃうんだよね」

食べっぷりがいいから、見ているだけで気持ちがいい。

そう伝えると、セシルは「そうじゃない」と言ったが、すぐに顔を明るくした。それから、「じゃあ」と俺の手を掴んで、串から肉を引き抜いた。程よく脂の乗った肉がセシルの口の中に吸い込まれていく。ぺろりと平らげ、口の周りについた脂を舌で拭う。

「やはりおいしいな。また次も買おう」

「食えることしか頭にないの？ セシルらしいけど。でも、おいしかったね」

俺は最後の一つを口の中に放り込み、近くにあったゴミ箱に串を捨てた。

そして、俺たちは再び城下町を歩く。いつ来てもここは賑やかだ。

セシルは目に映るものすべてが珍しいのか、「あれはどうだ」とか「これは興味深い」とときどき俺を見ながら話しかけてくる。それを聞き流していると、反応が薄いと言って眉を寄せた。俺はそんなセシルを見ているだけで笑顔になれた。

しばらく歩いて、とあるハンドメイドアクセサリーを売っている露店の前で立ち止まった。俺たちは小さくて美しいアクセサリーに視線を落とす。

「このブローチの宝石、ニルの瞳の色に似ているな」

「それを言うなら、このネックレスの宝石は、セシルの瞳の色みたいだよ」

並んでいた商品を互いにかざして笑い合う。こういったアクセサリーは、かわいいご令嬢にプレゼントするものだと思う。

街を歩く人々に目を向けると、やはりBLゲームの世界だから男性カップルがたくさんいた。腰を抱きながら歩いていたり、近い距離でしゃべっていたり、恋人らしい甘い空気が漂っている。

なんだかうらやましい。

そんな人々から目を逸らすと、セシルと目が合ってしまった。

「どうした？」

「え、いや。日中はカップルだらけだと思って」

「そう言われればそうだな」

セシルはそれまで気にしていなかったというように、あたりを見渡す。そして「確かにそうだな」と改めて口にする、周りにいるカップルたちをしばらく眺めていた。

「我が国は同性婚が可能だからな。それに、貴族同士であれば同性でも子どもを授けられないこともないからな」

「それって『祝福の花』のことだよな？」

俺が聞くと、少しだけセシルの顔が曇った気がした。しかし、すぐに「そうだ」と言っただけで俺に目を向ける。

『祝福の花』というのは、魔力と愛情を注いで咲かせる花のことだ。

このBLゲームの世界では、同性同士が『祝福の花』を育てることにより、子どもを授けることができる。ただ、相当な量の魔力と愛情を注ぎ続ける必要があるため、魔力の多い貴族にしか花を咲かせることができない。

ゲームでは、この『祝福の花』を攻略キャラと育てて子どもを授かる——といった展開が用意されていた。

「不思議な話だよな。セシルは好きな人が同性だった場合、『祝福の花』を育てるの？」

「ああ。俺の場合は、皇族として世継ぎの問題があるからな。好きな人との結婚を認めてもらうためにそうするだろう。と言っても、子どもを自分と相手が結ばれるための道具にはたくないが」

セシルは少し語気を強めてそう言った。

（そうそう。セシルは入学してきた主人公のアタックによって落ちる……はずだしね。それで、主人公と一緒に花を育てることになって……）

しかし、実際はどうなのだろうか。

主人公がセシルルートを選ぶとは限らないし、ハーレムエンドに突入する可能性だってあるわけだ。どうなるかは、この春からの一年の間に決まる。

セシルの幸せが俺の幸せだ。もしセシルが何か困るようなことがあれば、相談に乗ってあげたい。（……本当に？）

まだ先の確定していない未来を想像して胸が痛む。親友の恋愛相談なんて、前世のこともあってもうこりごりだ。

ただ、あのころとは違うことがある。今、俺はセシルに恋愛感情を抱いているわけではないのだ。前世の推しだから憧れを感じていたり、胸がときめいたりすることはあるが、恋心ではない。俺は、親友として彼を支えたいと思っている。これは本心だ。

「ニル、もう少し歩いてみよう。今度は武器屋に行つて、武器を新調しないか？」

「いいかも。父上に自分に合う武器を選べつて言われたし、ちょうど新しい武器が欲しいと思つていたところなんだよね。さつすが、セシル。俺のことをなんでもわかつてるね」

「当然だろ。お前のことをずっと見てきたんだ。これくらい当然だ」

セシルはそう言つて、誇らしげに口の端を上げて笑つた。

俺は先を歩くセシルの背中を追いかける。俺たちは目的地の武器屋に向かつて、しゃべりながら歩き続けた。

少し歩くと、大通りに出た。そこには雑貨屋や武器屋が並んでおり、荷物をたくさん持った人たちが行き交つていた。

俺たちは看板に剣と盾のマークが描いてある店に入った。

カランコロンと涼しげなベルの音が鳴り、金属と木の香りが混ざつた匂いが俺たちを包み込む。

内装は年季が入っており、木製の床は踏むたびにキィと音を立てる。だが店内の雰囲気とは異なり、ずらりと並ぶ武器はどれも新品で輝いていた。

奥から出てきた六十代くらいの店主に声をかけ、俺は欲しい剣の要望を伝える。店主は少し待つててくれと言つて席を外し、しばらくして戻つてくると目の前の机にずらりと武器を並べた。武器の性能を丁寧に紹介してくれるが、いまいちピンと来ない。

「うーん、お兄さん。これ以上軽いとなると、レイピアのほうがいいんじゃないかう」

店主は長い顎ひげを触りながら俺のほうを見る。

レイピアは細身の片手剣だ。刺突での攻撃がメインになるため、俺は実戦で使つたことがない。

「ニルの、レイピアはどうなんだ？」

「別に悪くはないけど使い慣れていないし。やつぱり普通の片手剣のほうがいいかな」

確かに、レイピアであれば持ち前の素早さを生かせそうではあるが、慣れていない武器の技を今から会得するのは難しい。それに、今欲しいのは来る日に扱える即戦力の武器だ。俺的には片手剣が好ましい。

店主は難しそうな顔をしながら、レイピア以外の武器も見せてくれた。

「真剣に選んでいるんだな。意外だ」

「ねえ、セシル。俺をなんだと思ってるの？ そりゃ、武器を新調するんだし、慎重にもなるよ」

「新調するから慎重に……ダジャレか？ おもしろいな」

「待って今のなし」

無意識だったが、気づいたセシルはブツと嘔き出した。羞恥心を抑えながら、武器に視線を戻す。やはり、レイピアはダメだ。心が惹かれないし、違う気がする。

レイピアを元の場所に戻してから、もう一度店の中を物色する。その間に店主は机の下からある剣を出して、俺に見せてきた。それは、小ぶりのナイフだった。

「これは？」

「ダガーだよ。このダガーはちよいとおまけ付きでな？ 若いもんが身を守るにはピッタリじゃよ。軽くて安い。どうじゃ？」

「あ、あはは、ありがとうございます。けど、護衛がダガー一本って」

いいダガーだが、今回はメインとして使える武器が欲しかった。護衛が短剣一本しか持っていないなんて、他の騎士から舐めていると思われる。そもそも、ダガーで戦える技量は俺にはない。

注文の多い客だなあ、と店主は俺を睨む。しかし、客の要望には応えたいらしく、どんな武器が欲しいのか詳しく教えてくれ、と言って紙を渡してきた。どうやらオーダーメイドで作ってくれるようだ。

「まあ、オーダーメイドだと三週間以上かかるがのう」

「さ、三週間以上ですか」

俺がそう聞き返すと、「今、うちにはいい金属も鉱石もない」ときっぱり言われてしまった。

職人のオーダーメイドとなればすぐにできないことはわかるが、三週間後では襲撃に間に合わない。俺は肩を落とした。

もう少し早くできないかと聞いてみたが、なら他の店をあたってくれと言われてしまったので、しぶしぶ了承した。

（じゃあ、今の剣でどうにかするしかないか。まあ、生き残ってからも使える剣があったほうがいいから頼むけどさ）

オーダーメイドなら、きっと俺の理想の剣になるだろう。生き残った暁に、新たな相棒を迎え入れるのもいいかもしれない。それに、今の剣も何度か使えば手に馴染むだろう。

セシルは、自分の剣と店内に置いてある剣を見比べ、吟味していた。

結局、セシルもオーダーメイドの剣を頼むことにしたようだ。しかも、俺が頼んだものよりも重量のある剣を注文していた。さらに、俺よりもはるかに時間がかかるらしい。

代金は後払いと言われたので、俺たちは注文が終わると店を出ることにした。ちなみにおすすめされたダガーはちゃっかり買ってしまった。

ダガーを懐に忍ばせ、そろそろ宮殿に帰ろうという話に落ち着いた。

まだ日は暮れていないし、今から戻ってもセシルの夕食の時間には十分間に合う。勝手に抜け出

してきたことがバレたら大変なので、来たときと同じく、見つからないように宮殿に戻らなければならない。

俺たちは足早に歩いた。

「今日は久しぶりにニルと遊べて楽しかった。また、こういう機会を作ろう」

「そうだね。本当に久しぶりだったなあ。学園がはじまったら遊べなくなりそうだからね。学生は勉強が本分だし」

俺は最初に感じていた不安をすっかり忘れていた。

俺たちは二年後にはモントフォーゼン学園を卒業する。その後、セシルは即位式を行う予定だった。第一皇子のセシルは学業とは別に、幼いころから帝王学を学んでいる。それもすでに大詰めに入っているが、学業との両立はやはり大変そうだった。幼いころからセシルの姿を見てきたから、彼の苦勞を誰よりも理解しているつもりだ。セシルは一度も弱音を吐かず、求められたことを完ぺきにこなしていた。

そんなセシルは俺の隣で、「ずっとニルと遊んでいたい」と皇太子らしくないことを言って頭をかいている。銀色の髪が太陽に照らされてキラキラと輝く。俺よりもたくましい背中を目で追いながら、彼の隣にいつまでいられるのだろうか考える。

(結局普通に遊んじやつたし……俺、ダメだな)

セシルといるといつい楽しくて他のことを忘れてしまう。それは、嫌なことから逃げているようにも思える。

このまま平和であればどれほどいいか。でも俺は、きつと訪れるだろう悲劇に備えなければならぬ。

気持ちを直し、すでに目と鼻の先にある宮殿に続く坂を上がついていこうとしたときだった。道の脇にうつそうと生い茂る木々の隙間から、何かがキラリと光った。俺は瞬時に危険を察知し、セシルに手を伸ばすと、そのまま彼を押し倒す。

俺たちが倒れた音とともに、足元にナイフが刺さった。

「ニル……！」

「大丈夫。怪我していないから。刺客……か。出てこい！」

先ほどまで感じなかった殺気を肌で感じ取る。俺はセシルの上から降り、腰に提げていた剣を引き抜いて周囲を警戒した。

つけられていたのか。それとも待ち伏せか。

セシルは俺の背中側に立つと、剣を抜いた。敵は一向に姿を現さず、緊張の糸が張り詰める。いつ、どこから襲いかかってくるかわからないし、何人いるかわからない。

俺たちは微動だにせずに、静かに呼吸を繰り返していた。背中合わせのセシルが「五人だ」と口にし、呪文を詠唱する。すると、セシルの足元に銀色の魔法陣が浮かび、風が巻き起こった。その風によって木々が勢いよく揺れる。すると次の瞬間、木々から一斉に黒服の男たちが落ちてきた。

「ほんとだ、五人だ」

「三人倒したほうが勝ちだな」

セシルは、まるで今からゲームをはじめめるかのように楽しそうに笑った。

セシルを狙ったの襲撃だろうに、当の本人はあまり危機感がない。命を狙われる状況に慣れてしまったという悲しい理由もある。だがそれ以前に、これまでセシルに傷を負わせることができた刺客は存在しない。そのためセシルは、刺客による襲撃を実戦訓練のように思っているのだ。

（これが、俺が死ぬイベント？）

いや、スチルは夜だったはずだ。こんな日のある時間帯ではない。これはよくある襲撃の一つだろう。

能天気なセシルと違い、俺は剣を握る手に力がこもっていた。俺が死ぬイベントではないにしても、死ぬ可能性は大いにあった。死と隣り合わせの感覚は何度経験しても慣れない。

「一、二の三で動くぞ」

「それいる？」

「フライングされて、先に倒されたら困るからな。勝負はいつも公平であるべきだ」

「こんなのを勝負にしないでよ」

セシルは剣を構えたまま、俺に笑いかけた。ここはセシルの無茶ぶりに付き合うしかない。

「一……二の……三っ！」

セシルの声とともに同時に動いた。俺は刺客の一人に斬りかかる。だが、一撃目はあと一步のところで避けられてしまった。しかし、この一撃目は陽動で、相手のバランスを崩すためのものだ。

二撃目は体勢が崩れたところを狙い、剣を深くと突き刺す。剣を引き抜くと、刺客は地面に倒れた。

俺の相手はまだ一人残っている。セシルに視線をやると、三人に囲まれていた。全員手練れには見えないので、三人相手でもセシルなら大丈夫だろう。

セシルの顔には余裕の二文字が浮かんでいた。刺客たちは息を合わせて、三人同時にセシルに襲いかかった。三方向からの攻撃に思わず、危ない！ と叫んでしまう。

だが、セシルには心配など無用だった。彼は冷静に剣を横に薙ぎ払う。すると、男たちの腹に大きな傷ができ、三人とも力なくその場に倒れた。

無事に刺客を全員倒すことができて一安心する。これで終わりだろうと安堵した瞬間、妙な違和感を覚えた。

セシルは、剣についた血を振り払って鞘に戻している。隙のできたセシルの足元の影がゆらりと揺らめいた。俺はまずいと思って全力で駆け出した。

「セシルッ！」

「ニル……ッ!?」

シャッ——と右腕に熱い何かが走った。熱はすぐに痛みへと変わっていく。

俺は痛みには耐えながら、セシルを庇うように押し倒す。先ほどよりも大きな音を立て、俺たちは地面に倒れた。だが、先ほどとは違い、俺はすぐに起き上がれなかった。涙で歪んだ視界の中、自分の右腕にナイフが刺さっているのが見える。

「ニル！」

「……セシル、五人じゃない。六人」

「……っ、クソ。俺のミスだ」

セシルの影から現れた刺客は、影の中に戻ろうとしていた。だが、その前にセシルが詠唱する。銀色の魔法陣が浮かび上がり、青い炎が燃え上がる。青い炎は矢となって刺客の胸に穴を開けた。刺客は声を漏らすことなくその場に倒れ、あたり一面は赤黒い血で染まった。とりあえず、全員片づけることができたようだった。他に仲間がいなか確認したが、周辺に人の気配はなかった。セシルは倒れたままの俺を抱き上げて、大丈夫かと身体を揺らす。ナイフの刺さった右腕からは、とめどなく血が流れていた。

「ニル、傷が……!」

「セシル、あんまり大声出されると、傷口に響くって……大丈夫、心配しないで……でも、宮殿を抜け出したのバレちゃったね」

苦笑いしつつ坂の上を見ると、父と複数人の騎士が駆け下りてくる。セシルはしまったというように「ああ……」と声を漏らし、呆然と立ち尽くしていた。

俺は右腕を押さえながら、震える右の手のひらに目を向けた。

セシルが襲われると思った瞬間、咄嗟に身体が動いた。セシルのことで頭がいっぱいになり、自分の身を守ることはすっかり頭から抜けていた。セシルさえ無事でいい、そう思ったのだ。でも、それじゃ意味がない。

(もっと鍛錬が必要だ。このままじゃセシルの未来を守れない……)

俺もセシルも、二人とも無事でなければ意味がない。俺が死んで、セシルの心の傷になることだ

けは絶対に避けなければならない。

駆けつけた父と目が合ってしまった。父は、「無茶をしたな」とでも言わんばかりの目で俺を見ていた。まだまだ自分は弱い。俺は目を逸らし、苦笑することしかできなかった。



宮殿の医務室のベッドにお世話になったのは久しぶりだ。

「兄上を守って傷を負ったと聞きましたが、もう大丈夫なのですか」

「はい。大丈夫ですよ。心配していただき、ありがとうございます。ネーベル殿下」

ベッドサイドの椅子に腰かけ、俺を心配そうに見ている小さな銀色の頭に、俺はぺこりと頭を下げる。

俺に話しかけてきたのは、ネーベル・プログレス第二皇子殿下——セシルの弟だ。その後ろにはセシルと主治医、ネーベル殿下の従者が数人控えている。大事になってしまい、俺はいたたまれない気持ちになる。

あの襲撃から三日経った。

ナイフの刺さった右腕にはまだ包帯が巻かれているものの、十分に動かせる程度には回復した。それもこれも、処置が早かったためだ。

あのあと、宮廷魔導士により治癒魔法を二つかけてもらった。一つ目は傷の広がりを防ぐ魔法。

二つ目は、傷の治りを早める魔法だ。そのため、俺の腕の傷は順調に塞がりつつある。ただ、痕は残ると診断された。

結果的に俺もセシルも無事だった。だが、無断で宮殿を抜け出したことはこっぴどく怒られ、自分の間の謹慎処分が言い渡された。俺は傷が完治するまではエヴィヘット公爵邸には戻れず、宮殿の医務室に閉じ込められている。

また、しばらく身体を動かすことも禁止された。あの奇襲から三日しか経っていないが、すでに退屈で、一日でも早く剣を振りたいという気持ちが強くなる一方だった。まだ脅威を退けることができていないため、不安が胸に残っていた。

診断が終わり、主治医は外に出て行く。だが、ネーベル殿下はその場を動かうとしなかった。従者に「外に行きましょう」と言われたが首を振って聞かない。

「ニルさんの看病をするんです」

ネーベル殿下はシーツを掴んでこの場にとどまる意思を見せた。従者たちは困った様子で顔を見合わせていた。

ネーベル殿下はまだ十二歳だ。小柄で手足は短く、頬はもちもちとしている。白い肌に銀色の髪、そしてセシルと同じ夜色の瞳は大きくて、まるでディスクドールのようだ。

年下に心配されているという情けなさはあったものの、ネーベル殿下の優しさが沁みる。

ネーベル殿下は、俺の腕を見て痛そうに自分の右腕をさする。ネーベル殿下を心配させないように言葉をかけようと思ったが、その前に後ろで腕を組んでいたセシルが、彼を叱るように声をかけた。

「おい、ネーベル。ニルが落ち着かないだろう？ それに、お前は勉強があるはずだ。家庭教師が待っていると聞いたぞ？」

「兄上……」

「お前は第二皇子だろう。勉強が苦手なのはわかるが、努力しろ」

セシルはネーベル殿下の肩を叩く。ネーベル殿下の顔が一瞬曇ったが、すぐに切り替えたように、「はい」と頷いて立ち上がった。

（セシルも人のこと言えないじゃん）

今回の件でセシルは、謹慎処分の他に勉強と鍛錬の量を増やされたと言っていた。彼もここに居座り続けるのはおかしい。

大人げないと思いつながら、俺はネーベル殿下に微笑んだ。

「ありがとうございます、ネーベル殿下。俺のことを心配してくれて」

「いえ、当然です！ ニルさんは、僕の第二の兄のような存在ですから！」

へへ、と笑うネーベル殿下を見ているとさらに心を撃ち抜かれる。あまりのかわいさに、抱きしめたくなってきた。

しかし、そんな俺たちのことを、セシルは一段と不機嫌そうな表情で睨みつけた。ネーベル殿下はそれに気づいたのか、「名残惜しいですが、失礼します」と言って立ち上がる。そして、去り際にこそりと耳打ちした。

「兄上、僕たちが仲よくしているのを見て嫉妬しちゃったみたいです」

「え……？」

その後、何事もなかったようにネーベル殿下は部屋を出て行った。

ネーベル殿下に言われたことをいまいち理解できないでいると、「おい」と上から声が降ってきた。見上げると、むすっとした表情のセシルが俺を見下ろしている。

「何？ セシル」

「ネーベルに何を言われた？ あいつも年頃の男だ。お前を狙っているかもしれない」

「狙っている？ それ、どういうこと？ それとなんで怒ってるの」

「怒ってなどいない。はあ……」

セシルは苛立ったようにため息をつき、髪をかきあげた。理由はわからないが、今は虫の居所が悪いらしい。刺激しないようにしようと、俺は余計なことは言わないことにした。

俺とセシルしかいなくなった医務室に、微妙な空気が流れる。セシルはネーベル殿下が座っていた椅子に腰かけ、長い足を組んだ。

「鍛錬は？」

「今日はサボる」

「サボるって。勉強も鍛錬も量を増やされたって聞いたけど。サボったら怒られない？」

「怒られても別に構わない。それに、お前も一人だと退屈だろう？」

「俺のことはいいんだよ。セシルが――」

「……じゃあ、俺と一緒にいたい」

セシルはそう言って口を尖らせた。今日のセシルはなんだか駄々っ子のようだ。でも、セシルの言う通り、一人では退屈だった。

外に出られないだけではなく、気を紛らわせるために外を見ようにも、この部屋の窓は小さすぎる。一人だと気が滅入るから、セシルがいてくれるのは正直嬉しかった。

「そう……じゃあ、ここにいていいよ」

気を遣う相手がいなくなつて、俺はうんと上に腕を伸ばした。身体の節々から音が鳴る。そんなふうに俺が簡易的なストレッチをしていると、心配そうに揺れる夜色の瞳と目が合った。

「腕は痛くないか？」

「うん？ まあ、この通り動かせるし大丈夫だよ。治癒魔法はかけてもらったけど、魔法も万能じゃないからね。痕は残るみたい。でも、それは主君を守った勲章ってことで」

セシルもこれで安心してくれるだろうと思っていると、なぜか彼は顔を暗くした。

「悪かった……な」

セシルはそう言うのと、視線を下に落とした。膝の上で手を握り、膝に爪を立てている。セシルが謝ることなんて一つもないのに、どうして自分を責めるのだろうか。

（そんな顔しないでよ……）

セシルを心配させてしまったという事実、胸が痛くなった。でも、きっとセシルのほうが苦しんでいる。

もし俺が自分の死を回避できなかったら……そのとき、セシルは正気を保っていられるだろうか。